
総 説 看護における「事例検討会」に関する文献検討

Literature examination about the “ Case Study Group ” in nursing

永田裕子 篠木絵理 濱田麻由美

Hiroko NAGATA, Eri SHINOKI, Mayumi HAMADA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

看護における「事例検討会」に関する文献検討

Literature examination about the " Case Study Group " in nursing

永田裕子 篠木絵理 濱田麻由美

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Hiroko NAGATA, Eri SHINOKI, Mayumi HAMADA

Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

要 旨：本稿は、看護に関する事例検討会を取り扱った報告書にはどのようなものがあるか、その中でも、看護基礎教育における事例検討会の方法やその活用目的などを明らかにするため、文献検討を行った。文献検索は、医学中央雑誌 Web ver.4を用い、2005年以降2010年までを検索条件に、「事例検討会」と「看護」を検索語として行い、71件が検索された。この71件は、事例検討会の取り扱われ方を知るために分類し、さらにその中から、事例検討会の内容と、その評価がわかる文献44件を選択し分析対象とした。はじめに、対象となった44件を、看護分野や領域別、事例検討の開催目的別に分類し、開催目的のうち教育・学習手段としているもの32件を選択し、さらに記述内容により分類した。次に、32件の中から看護基礎教育における事例検討会に関する文献が7件を選択し、文献の研究目的別、さらに各文献の記述内容から事例検討会の実施方法や活用方法等の内容を分析した。その結果、看護基礎教育における事例検討会では、事例提供者、ファシリテーター、参加者それぞれの立場で多様な学びがあり、事例検討会の継続性が望まれていることや、効果的な実践に結びつけるには、準備段階からの開催上の工夫が必要であることが明らかとなった。

キーワード：事例検討会、看護基礎教育

受付: 2011年5月11日

受理: 2012年2月1日

はじめに

筆者らは、2010年度医療保健学部看護学科 Faculty Development (以下FD) 委員会のメンバーとして、看護教員を対象とした事例検討会を企画運営する機会があった。FD活動として開催する事例検討会は初めての試みであり、継続的に開催の予定であったが、1回目終了時のアンケート調査やFD委員会担当者による振り返りにおいて様々な課題が見出され、次回開催までに「事例検討会」そのものへの理解を深めたいと考えた。そこで筆者らは2回目の事例検討会をより有意義なものとするため、「事例検討会」に関する文献検討を行い、その結果をもとに若手教員による看護教育研究会での学習会開催を経て、企画・運営に活用したいと考えた。本稿では、筆者らが行った文献検索及び文献検討の内容から得られた示唆を報告する。

目的

本稿における文献検索及び文献検討の目的は、看護関連文献において、事例検討会を取り扱ったものは、どのような内容であるか、看護基礎教育において事例検討会はどのように活用されているかを明らかにすることである。

方法

1. 対象文献の検索方法

文献検索は、医学中央雑誌 Web版 ver.4を用いた。検索語は、「事例検討会」と「看護」とし、検索対象年は2005年から2010年、抄録があるものを選定条件とした。その結果、71件が検索され、これらを分析対象とした。

表1 看護基礎教育に関する事例検討の文献（2005～2010）

著者	主な参加者	事例のテーマ	開催の方法	実施結果	課題
安永ら (2007)	臨床指導者 看護教員	臨床指導者からは昨年度実習で、学生の指導で困った事例。教員からは、今年度の実習で指導が困難であった事例。	4箇所の精神病院に勤務する看護師でワークショップに参加した18～21名と精神科実習を担当した教員9～11名で2回実施した。	学生のパーソナリティに焦点が当てられ、学生理解を踏まえた指導のあり方などについての議論が充分に行えなかったことが明らかになった。参加者は自分の経験や考え、思い、状況などと事例を照らし合わせながら多面的にアセスメントすることができていることが分かった。対象者が主体的に参加した。	議論が充分に行えなかったことが明らかになったことから、今後は司会進行の未熟さや議論が焦点化され先に進まないときの軌道修正していく必要性を見出している。
松木ら (2006)	臨床指導者 看護教員	事例は指導者が指導上で戸惑い、疑問に思った場面や、参加する教員・指導者に意図的に学習してほしい内容であった。	実習指導者講習会の中で、公立看護基礎教育3年課程専修学校の教員10名と実習先指導者13名で行った。年に2回実施した。	学習会での学びは「学生への関わり方」「自己啓発」「連携意識と連帯感」「望ましい指導者像」「実習指導力の向上への意欲」と参加者のその後の行動変容につながった。学びを活かしていると感じる場面で一番多かったのは、行動計画発表時である。教員側、指導者側がそれぞれの役割を自覚した学びを得ている。	意図的に事例を選定することで、実習指導に対する意識を高めていく。教育と臨床の現場の連携を更に高める。
黒田ら (2005)	臨床指導者 看護教員	実習中の学生と指導者とのやり取りの場面で指導者が対応に困った場面。	学部で実施されている研修会の一部。実習指導の研修会修了者との交流会研修生40名、事例提供者4名、教員3名により実施した。	3名の教員が「この授業の教育目標」が達成され、研修生にとっては、「実習指導とは」がわかり、事例提供者にとっては、「実習指導とは」に照らして実習の評価が出来るよう、お互いの認識を重ね、補い合いながら実現されている。事例検討会の目標に近づく。看護観の再構築と実習指導者像の形成を目指した事例検討会で介入を行った教員の認識の特徴を見出せた。	より学びの多い「交流会」が展開できるようにファシリテーターとしての自己認識を鍛えて努力する。
鎌田ら (2005)	看護教員	看護教員が、自己が抱えていた疑問や悩みを持ち寄った。	公開講座において、看護教員5名が各自が抱える疑問や悩みを持ち寄り、学生への関わりについて討議する。	参加者は悩みを解決し、今後どのように関わって行けばよいか明確に出来た。学びとして8つのカテゴリーが取り出せた。事例検討会による学びの過程の構造が見出せた。	事例検討会を繰り返し実施する。
中島ら (2010)	看護学生	「思いがけず上手くいった」「これが看護なのだと学べた」「困難を感じた状況」など。	臨地実習を全て行った学生が事例の選定を行い、発表時間1人10分、質疑応答5分による、テーマ毎の発表会を行う。	事例検討会で学生が共有でき学んだことを、4つのカテゴリーに分けた。事例検討会の取り組みで学生にとって難しいことは、資料作成、プレゼンテーション、発表内容の理解、質疑応答であった。	効果的な事例検討会を行うためには、目的に沿った集団編成などの必要性がある。
糸島ら (2005)	看護学生	不明。	臨地実習を全て行った学生が事例の選定を行い、発表時間1人10分、質疑応答5分による、テーマ毎の発表会を行う。	実施後のアンケート結果から、事例検討会の効果の高かったものと、低かったものを見出した。事例検討会による参加者の学びと効果について、教員の介入についての役割、学生と教員にとっての課題が見出せた。	質疑応答や討論を進めていく上で教員の介入の必要性や指導方法の改善、向上（討論の進行）のためにはファシリテーターの進め方に課題があり、個々の力量の向上の必要性がある。
糸島ら (2006)	看護学生	思いがけず上手くいった、またはこれが看護なのだと学べた、又は困難を感じた状況等。	臨地実習を全て行った学生が事例の選定を行い、発表時間1人10分、質疑応答5分による、テーマ毎の発表会を行う。	事例検討会の効果を23項目測定し、効果が高いものを見出した。また学生が難しさや問題を感じた項目が見出せた。	事例検討会の時期や時間、グループ編成、討議方法などの検討の必要性がある。

2. 対象文献の分類及び分析方法

はじめに、71件の対象文献は抄録を基に、各文献での「事例検討会」の取り扱い方を知るため、各文献の研究目的や研究内容の類似性により分類し、概観した。

次に、71文献の中から、事例検討会の内容とその評価がわかる文献を選択し内容を分析した。

事例検討会の内容とその評価が分かる文献は、看護の分野・領域別、次に事例検討会の開催目的により分類した。開催目的により分類した文献のうち、教育・学習手段を目的とし、かつ基礎看護教育に関する文献を対象に、事例検討会の対象者の背景と役割、学びや効果、開催上の工夫や課題について、内容を分析した。

結果

1. 各文献における「事例検討会」の取り扱い方

検索された71件の対象文献の抄録を基に、事例検討会の取り扱い方について分類した。その結果、問題解決の一方法として事例検討会を提案するもの11件、多職種連携等の一方法として事例検討会を位置づけるもの16件、事例検討会そのものを検討しており、事例検討会の内容とその評価がわかるもの44件であった。

2. 文献の記述からみた看護に関する事例検討会

検索された71文献の中から、事例検討会の内容とその評価がわかる文献44件を選択し、事例検討会の開催者や参加者の領域別に分類した。その結果、参加者の領域が複数に及ぶもの13件、看護教育7件、精神看護7件、救急看護6件、地域連携5件、周産期看護2件、慢性期看護2件、急性期看護2件、その他2件であった。参加者の領域が複数に及ぶものには、看護部での定期的な実践や卒後教育としての実践が多く、少数のものでは、自主研究会での実践があった。

事例検討の目的は、教育・学習手段として、問題解決のため、研究的に高める段階として位置づけ技術化を図るための3つに大別している¹⁾。この分類を参考に、事例検討会の開催目的により分類した。このうち開催目的が、教育・学習手段であるものは32件であった。

3. 看護基礎教育における事例検討会

看護基礎教育における事例検討会の実際を知るため、先に分類した開催目的が教育・学習手段である文献32件を検討したところ、看護基礎教育に関する文献は7件(22%)であった。この7文献の記述内容を分析し、事例検討会の対象者の役割を分類し、さらに、事

例検討会による学びや、開催上の工夫、課題についてそれぞれ検討した。対象となった7文献の概要は、表1の通りである。

1) 各文献の研究目的

7文献の研究目的は4種類あり、実習指導で困難を要した事例について、成果・効果を明らかにする研究が3件、事例検討会の学びを明らかにする文献が3件、事例検討会の課題を明らかにする研究が2件であった。この他、ファシリテーターの事例検討会中の認識の特徴を明らかにする研究1件であった。開催目的が複数である文献は2件であった。

表2 研究目的

事例検討会の成果・効果を明らかにする	3
事例検討会の学びを明らかにする	3
事例検討会の課題を明らかにする	2
ファシリテーターの事例検討会中の認識の特徴を明らかにする	1

2) 各記述内容からみた事例検討会の実施方法

看護基礎教育に関する事例検討会の内容は、全て臨地実習の実践場面であった。事例検討会への参加者の立場(表3)は「看護教員と臨地実習指導者やその関係スタッフ」が3件、「看護教員のみ」が1件、「看護学生と看護教員」が3件であった。「看護学生と看護教員」は全て同じ学校の教員によって行われた研究であった。

表3 検討会の参加者

看護教員と臨地実習指導者	3
看護教員のみ	1
看護教員と看護学生	3

事例検討会の開催頻度(表4)は、年1回3件、定期的な催しとして年2回が3件、不定期に年1回以上が1件、開催頻度が文献からは分からないもの2件であった。

表4 開催頻度

年1回	3
年2回	1
年1回以上	1
不明	2

事例検討の主な方法は、グループ別討論であり、各グループともに同じ事例を討論する場合と、グループにより、事例が異なる場合があった。

事例検討会のテーマは、全てがあらかじめ決められており、6件は、「実習における疑問や悩み、困難について」提示され、残りの1件は「印象に残ったこと、工夫したこと、みんなに伝えたいこと」であった（表5）。実習における疑問や悩み・困難をテーマとする6件の中には、看護学生による事例検討会があり、「思いがけず上手くいった事例やこれが看護なのだと学べた事例内容」が提示されていた。

以上から、事例提供の内容の多くは、臨地実習の体験事例で尚且つ、困難な事例が選択される傾向があることが窺える。

表5 設定されていたテーマ

実習における疑問や悩み・困難	6
印象に残ったこと、工夫したこと、みんなに伝えたいこと	1

3) 各記述内容からみた事例検討会の対象者の背景と役割

事例検討会の対象者には参加者、ファシリテーター、事例提供者、企画運営者がおり、それぞれの立場で見出されたことは以下の通りである。

①ファシリテーター

ファシリテーター（司会・進行役を含む）には、参加者と開催の目的や目標を共有しておくことが求められる。7文献の中では、ファシリテーターに注目した文献が1件あった。また、事例検討会で、パーソナリティーに議論が焦点化して、事例検討会が先に進まなかった問題は、司会進行の不熟さや、議論が焦点化して先に進まなくなった時に軌道修正するための方策が事前に練られていなかったことに由来することや、討論をしやすい雰囲気を作成し、リラックスした場を作成している²⁾。また、学生間で質疑応答や討論を進めていく上で、教員の介入の必要性や指導方法の改善や向上の必要性を示唆するとある³⁾。また事例検討会に立ち合った教員は、進行役の教員が討論の焦点を定められずにいたときに、「実習指導者として自己の思い描いた内容」と事例提供者の取った言動との違いについて質問をし、実習指導の状況に応じた評価へと討議の焦点が絞られるようにしていたとある⁴⁾。7文献の中には、ファシリテーターの役割が存在したのか不明なものも含まれていた。

②事例提供者

事例提供者は、事例検討会の席で提供する事例を選択し準備し、当日に発表する人を指す。看護学生が事例提供を行うことに関しては「プレゼンテーション、資料作成、質疑応答」の難しさが挙げられている⁵⁾。また、教員や臨地実習指導者らに関しては、意図的に事例を選定しており、精神的に厳しい場面もあったが、

客観的に見つめ直すことでその後の指導に生かすことが出来たとし、事例を提供することの効果と難しさの両方について触れている⁶⁾。

③企画運営者

事例検討会の企画運営は、準備から片付け、アンケート集計などの企画を練ることや、実践へのサポートをすることを指す。7文献では、全てに看護教員が携わっている。議論が焦点化して先に進まなくなったときに軌道修正するための方策を事前に練っていく必要性を述べている²⁾。また、あらかじめファシリテーターを決めておく必要性も述べている。その他の文献でも、事例に合わせたテーマを決めておくなど、いくつかの工夫がなされていることが書かれている。

④参加者

事例検討会で討論を行うメンバーを指し、事例提供者と司会者を除いたものを参加者と位置づけていた。参加者は、全員が顔見知りである場合と、そうではない場合があった。事例検討会に参加後の変化として、参加者の6割以上が、事例検討会での学びをすぐに実際の実習指導に活かすことが出来ていたと述べている（松木、2006）。7件中6件の文献では、参加者の学びや効果に注目している。

4) 各記述内容からみた事例検討会における学びや効果

事例検討会における学びや効果は、教員のみで行った事例検討会⁷⁾では、8つにカテゴリー化しており、「学生の見方が変わると関わり方が変わる」「教員の学生の見方と指導の傾向が明らかになる」「学生の特性を理解することで、学生を成長に導くことができる」「教員が援助の根拠を明らかにしておくことで、学生指導ができる」「学生の捉える対象像と教員の捉える対象像を近づけていくことが、看護過程の展開方法である」「教員の学生の見方と指導の傾向が明らかになる」「教員の悩みが共有できる」「指導の意味づけが出来たことで、今後の関わり方が明らかになる」であった。また、教員と臨床指導者により行った事例検討会では、5つにカテゴリー化しており「学生への関わり方」「自己啓発」「連携意識と連帯感」「望ましい指導者像」「実習指導力の向上への意欲」であった。この文献では、それぞれの役割を自覚した学びを得て参加者のその後の行動変容につながったことを明らかにしている⁶⁾。看護学生が全実習を終了後に行った事例検討会では、共有できた学びについて以下の4つにカテゴリー化されている。「新しい知識の獲得と思考の広がり」「患者/家族理解の深まり」「自己の看護の振り返りと看護観」「看護介入方法への気づき」である³⁾。

5) 各記述内容からみた事例検討会の開催上の工夫

いくつかの文献では、開催上の工夫について記述があった。事例検討会を円滑に進めていくために、経験型実習教育に関するフォーマット（場面、学生の経験、患者の経験、学習可能内容、教員や看護師の関わりの方針・方法）を使用している²⁾。また、事例の提示方法としてロールプレイを実施している。また、効果が得られたこととして、主体的に参加するために、グループ編成で興味があるものに参加するようにしたり、リラックスし、討論しやすい雰囲気を試みるため、コーヒーなどを準備するなどがあげられた。

意図的に事例を選定することで、教員と指導者が役割を自覚した学びを得たり、教員と指導者が指導の方向性を共有するきっかけとなった。グループディスカッションの後、全体討議の時間を設けることで、学習会の内容が深まった。また作成資料はプロセスレコードを用いることで、リアルに指導場面をイメージすることが出来た。資料の配布を開催の1週間前に行うことで、開催時間を有効利用できた。その結果、実習時だけでなく、多岐にわたって行動変容が見られ、効果が得られたとしている⁶⁾。この他の文献にも、運営企画段階では、様々な工夫が示されている。

6) 各記述内容からみた事例検討会の実施後の課題

7文献全てにおいて、事例検討会を今後も継続して実践していく必要性を述べている。また、次回開催する事例検討会への課題を見出している。議論が充分に行えなかったことが明らかになった事から、今後は司会進行の未熟さや議論が焦点化され先に進まないときには軌道修正する必要性を見出している²⁾。より学びの多い「交流会」が展開できるように自己認識を鍛えて努力する⁴⁾。質疑応答や討論を進めていく上で教員の介入の必要性や指導方法の改善、向上の必要性が示唆されており、討論の進行のためにファシリテーターの進め方に課題があり、それについて個々の力量の向上の必要性が述べられている⁸⁾。また、この他には、効果的な事例検討会を行うためには、目的に沿った集団編成などの必要性³⁾や、事例検討会の時期や時間、グループ編成、討議方法などの検討の必要性⁵⁾から、企画運営での改善のための課題が多く示されている。

考察

1. 看護関係文献における事例検討会の取り扱い方

看護における事例検討会は、さまざまな意図を持って、多領域で実践されている。71文献を概観すると、病棟などの看護実践現場では事例検討会は多く活用さ

れていることが窺えた。また、実践の目的は様々あるが、教育・学習手段として、実践されていることが一番多いことから、学びの手段として、成果が期待されていると考えられる。一方、看護基礎教育の分野では、事例検討会の文献は7件と少ないものであった。

事例検討会は、特に臨地実習における学習方法としては従来から取り組まれ、また標準的なものと考えられ、改めてその取り組みがまとめられることが少ないのではないかと推測される。

2. 看護基礎教育における事例検討

1) 対象者と役割

企画運営者が求める事例の選定の基準としては、実習における疑問や悩み、困難については6件が該当し、臨地実習の体験事例で尚且つ、困難な事例が事例提供者によって選択されている。これは、臨地実習では教員、学生、実習指導者にとって困難を生じやすいことが伺える。また困難に対する改善策として、事例検討会が選択されている。開催した結果、多様な効果を見出せていることがわかる。7文献からは、臨地実習の向上のためには、事例検討会が重要であり、今後の事例検討会の継続の必要性が示された。

ファシリテーターに関しては、ファシリテーターは事例検討会の開催の席に、必ずしも存在するとは限らない。しかしながら何を話し合いたいのか常に目的を共有し、効果的な事例検討会を行うためには、ファシリテーターの存在と活動の内容の重要性が何うことができる。また、事例提供者が、討議中に不快な感情を抱かぬように、介入する必要性が述べられており、看護基礎教育分野以外の文献においても記載されていた。事例検討会は、事例検提供者が安心して自己一致できる安全な場にしていくことが重要であり、充分配慮できるような実践を試みる必要があると指摘している⁹⁾。さらに、事例検討会を開催するにあたって、それぞれが担う役割があり、個々の活動によって事例検討会の流れは、左右される可能性があることがわかった。事例検討会を良いものにしようとする場合、開催目標に向かって、それぞれが果たす役割を熟慮する必要がある。開催する際の事例提供者への配慮の重要性を何うことが出来る。

2) 事例検討会における学びや効果

事例検討会により、参加者は、多くの学びを得られている。内容を見ると、学生、教員、臨床指導者としての学びもある一方で、個人にとつてと集団としての学びが含まれている。個人にとつての学びでは、自己啓発、自己教育力への影響がある。集団にとつては、

教員と指導者間で行った事例検討会では、連帯意識と連帯感が生まれたりしている。教員間で行ったものでは、教員の悩みが共有できるとあり、個人の学びだけではなく、チームワークにも繋がっている。看護学生間で行った事例検討会では、参加者同士で共有の効果がある。集団によって自分だけでは、気づくことのなかった事柄、教科書からは習得しづらい学びを得ることが出来ていることがわかる。

3) 事例検討会の開催上の工夫

事例検討会を行う際は、参加者の多くが参加した意義を見出せるような開催となることが重要である。効果的な事例検討会を行うためには、目的や流れなどを明らかにした上で、自分たちに合った企画・運営を行っていく必要がある。それには様々な工夫が有り得る。発言が少ない集団であったり、またその逆で、意見が多く収拾の難しい集団もあることが考えられる。より学びの多い事例検討会の開催を狙うのであれば、それぞれに合った開催上の工夫を行うことで、様々な効果が期待できることがわかった。企画運営の際に、ねらいを定めておくことが重要と思われる。運営段階で十分に練って、参加し意見を述べやすいような雰囲気作りを心掛けることや、ファシリテートに充分配慮することが不可欠であり、予測を基に準備を行うことが重要である。開催中に関しては、提供者が事例提供したことを、肯定的に受け止められるように配慮をする必要がある。そのためには、参加者の聞く姿勢、例えば、看護研究やグループワーク時と同様に、悪い内容だけでなく、良い内容もリフレクションをすることや、ファシリテーターの介入など、役割に沿った配慮の必要性が重要であると思われる。また事例検討会からの学びは、集団に属した立場や役割に応じた学びだけではなく、個人にとっての効果があり、それに対する支援も行っていけると良い。

4) 事例検討会実施後の課題

7文献全ての文献で、事例検討会開催の継続の必要性を示唆していることから、学びの効果が大きい実践であることがわかる。しかし、実践に伴い、運営などの点から反省する点が多く生じていることもわかる。多様な職種に共通した事例検討会の開催時の失敗要因や構造設定など下準備の重要性を報告している¹⁰⁾。また、問題の核心に迫る鋭い直面化は、事例提供者を傷つけてしまうといった、危険性を常にはらんでいる¹¹⁾と報告していることから、事例検討会の効用は、プラスの面ばかりではないことがわかる。このことから事例検討会は、必ずしも成功とは言えない結果が生じ

ていることが推察される。

事例検討会による学びは、教える、教えられるといった一方通行になりがちな教授法ではなく、その場の状況によって学びが生じる実践であるからこそ、時には、不完全燃焼な思い、語りによる後悔など、複雑な心境となる可能性が窺える。看護基礎教育における事例検討会を開催する場合は、事例となる学生、参加者や環境などの状況を十分把握し、企画・運営の案を十分に練ることが必要である。それによって、それぞれが役割を基に工夫を試みることで、不完全燃焼な思い、語りによる後悔などのマイナス面を減らすとともに、状況によって相互作用から深い学びとなるなどプラス面を増やし、深い学びにつなげられると考える。

まとめ

看護基礎教育において、事例検討会の開催の目的は、看護学生の学びを深めることと、看護教員自身の指導力の向上と、臨床現場実習指導の改善を主に行っていた。そして、実施した結果、事例検討会に携わった学生、教員、指導者それぞれの学びに繋がり、事例検討会の実施前後での変化が報告されていた。それ故、看護基礎教育の場で行われる臨地実習内容の振り返りには、事例検討会は有効な手段であり、また、臨地実習の向上や看護の発展につながる方法の一つであることが改めてわかった。

しかし、効果がある一方で、事例検討会に参加することによって、不快な思いをする事例提供者や、話し合いの内容が、開催目的から離れてしまうなど、課題を生じることもあることを見出した。事例検討会への参加による学びの深さや、ネガティブな印象は、事例検討会の進め方によって、大きな影響を受ける。事例検討会は、参加者、事例提供者、ファシリテーター、企画運営者の個々の役割によって支えられている。特に、参加者の参加度やファシリテーターと企画運営者の力量によって、結果は大きく左右されることがわかった。看護基礎教育に携わる教員の場合は、学生が行う事例検討会を支援する場合や、自らが参加する事例検討会がある。今後の課題は、より効果的な事例検討会の開催となるように、どちらの場合も、個人、チーム力の向上につながるように、役割を意識しながら、集団に合った事例検討会への参加や開催を目指すことと考える。

引用文献

- 1) 平松則子. 事例検討会は何故必要か. 看護実践の科学

2009 ; 34 : 3

- 2) 安永薫梨, 松枝美智子, 安田妙子, 中津川順子, 村島
さい子, 中野榮子, 安酸史子. 経験型精神看護実習に
おけるチームティーチング体制の検討 実習前後に
行った事例検討会の成果について. 日本看護学会論文
集: 看護教育 2007 ; 1 : 96-98.
- 3) 中島優子, 山田豊子, 黒木美智子, 山本多香子, 田村葉
子. 成人看護実習における事例検討会の効果と課題.
京都市立看護短期大学紀要 2010 ; 05 : 171-178.
- 4) 黒田るみ, 佐藤淑子, 戸田肇. 看護観の再構築と実習
指導者像の形成を目指した研修会の実施とその評価
平成 16 年度に開催した「交流会」における教員の認
識の特徴. 北里看護学誌 2005 ; 03 : 38-44.
- 5) 糸島陽子, 古屋佳子. 臨地実習終了後の事例検討会の
効果 2). 京都市立看護短期大学紀要 2006 ; 08 : 149-
159.
- 6) 松木和子, 三浦文子, 八木直子, 馬場寛子, 田宮寿恵美,
内匠伊佐子. 教員・臨地実習指導者合同学習会の成果
プロセスレコードを用いた事例検討会からの学び.
日本看護学会論文集: 看護管理 2006 ; 03 : 424-426.
- 7) 鎌田廣子, 石橋佳子, 鶴間百合子, 平塚厚子, 徳本弘
子. 看護教員の事例検討による学びの過程. 日本看護
学会論文集 2005 ; 01 : 181-183.
- 8) 糸島陽子, 鯉坂由紀, 吉田広美, 山田豊子. 臨地実習
終了後の事例検討会の効果. 京都市立看護短期大学紀
要 2005 ; 09 : 131-139.
- 9) 笠松理恵子, 美濃由紀子, 大迫充江, 佐藤るみ子, 宮
本真巳. 医療観察法病棟におけるグループ・スーパー
ビジョン機能に関する研究 3 年目の実態報告とエン
パワメント効果に影響を及ぼす要因. 日本看護学会論
文集: 精神看護 2009 ; 01 : 164-166.
- 10) 野中猛. 事例検討会の開き方. 保健師ジャーナル
2009 ; 03 : 190-194.
- 11) 米山奈奈子. なぜ事例検討を行うのか 自らの体験を
振り返って. 保健師ジャーナル 2009 ; 03 : 184-189.